

「第3波」「第4波」で感染者が急増 困難に立ち向かう医療スタッフ

西尾市では、2年4月4日に初めて新型コロナウイルスの感染者が発生しました。それから1年余りで1,000人近い新規感染者が発生。「第3波」の2年11月からの3か月間と、感染力が強い変異株がまん延した「第4波」の今年4月以降に、感染者が急増しています。

感染患者を受け入れている市民病院では、医師や看護師などの医療スタッフが懸命にウイルスと闘っています。



重症患者も受け入れている市民病院

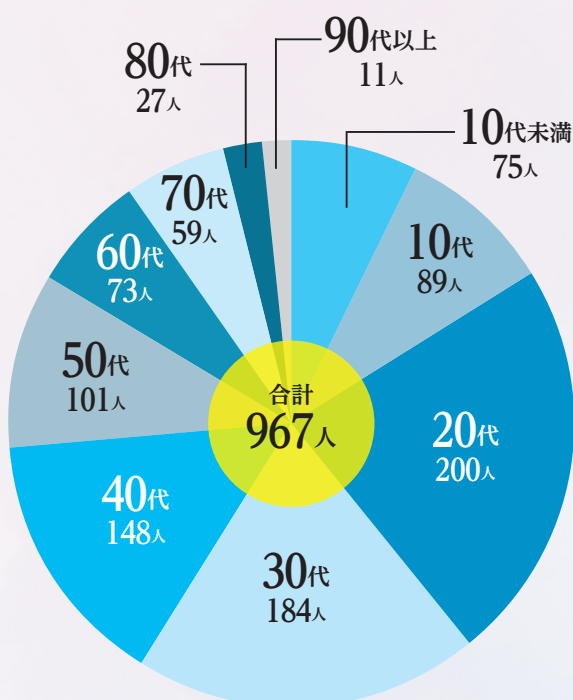
感染患者が入院できないことも
中程度の症状の患者を受け入れる2次救急病院である市民病院では、新型コロナウイルス感染症の流行当初、軽症から中等症の感染患者を受け入れていました。しかし、重篤な患者を受け入れていた近隣病院の病床が逼迫してきたため、現在は重症患者の一部を受け入れています。一度入院すると退院まで早くても2週間ほどかかることもあり、市民病院の病床も逼迫。日によっては救急外来に運ばれてきた患者が入院できない

西尾市は、人口10万人当たりの新型コロナウイルスの感染者数（感染率）が西三河地域で上位。特に、若年層の間で感染が広がっています。救急外来で市民病院に運ばれてきた感染患者の中には「会食した」「久しぶりに遠方の家族に会った」という方たちも。「コロナ慣れ」して感染しやすい行動をとってしまう方が増えているのかもしれない。

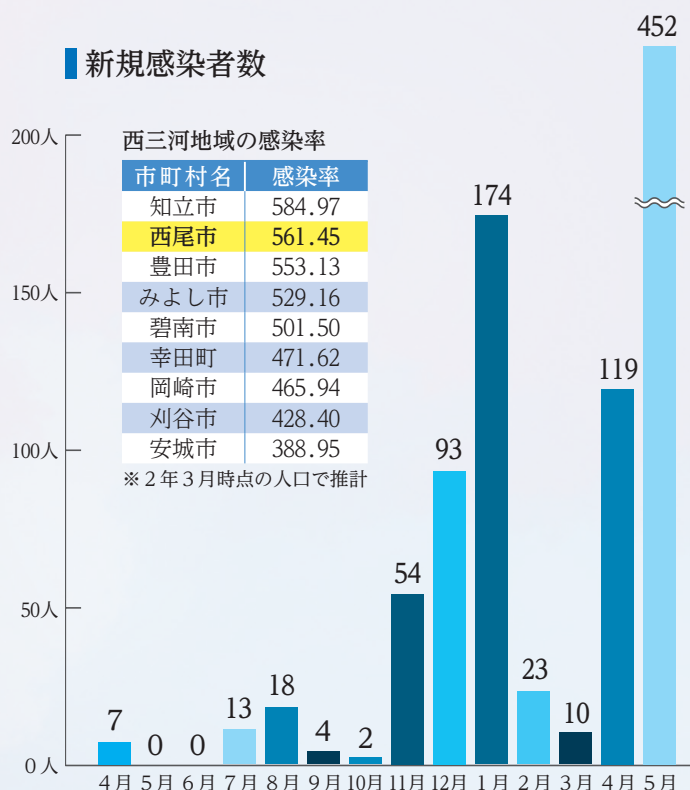
西尾市の感染症発生状況

(2年4月～3年5月)

年代別感染者数



新規感染者数



西三河地域の感染率

市町村名	感染率
知立市	584.97
西尾市	561.45
豊田市	553.13
みよし市	529.16
碧南市	501.50
幸田町	471.62
岡崎市	465.94
刈谷市	428.40
安城市	388.95

※ 2年3月時点の人口で推計



市民病院 6階東病棟 副主任
高田 絢 看護師

かったり、重症化しても転院先が見つからなかったりすること。現場で働くスタッフは、日々変わる状況の対応に追われています。

普段と違う状況の中で看護に集中

新型コロナウイルス感染症の患者を受け入れている市民病院の6階東病棟は、院内感染の予防策がとられ、他の病棟とはまるで別世界のようにです。医師や看護師は医療用マスクや帽子、エプロン、フェイスシールド、ゴーグルなどを装着し、接する患者が変わるごとに交換しています。

「毎日が必死」。6階東病棟で勤務する高田絢看護師は、汗だくになるほどの慌ただしい日々を送っています。「酸素濃度や心電図モニター、点

滴の投与状態を確認して少しの変化も見逃さないようにしている。医療用マスクやフェイスシールドを装着して、互いの声が聞こえづらいため、病室の清掃はもちろん、病棟全体の清掃・環境整備、シーツの交換など、看護以外の業務も看護師が担っており、普段以上に心身への負担がかかること。難しい状況の中でも、一人一人をしっかりと看護することに集中しています。

入院中の生活

入院中の新型コロナウイルスの感染者は、病室の外に一切出られません。

せん。家族にも会えず、テレビを見るなどして病室で過ごしています。「早く帰りたい」「家族が心配だ」と不安を口にする患者さんが増えている。何か困ったことがないかとか、常に声を掛けてストレスを減らすようにしている」と高田看護師。高齢の患者には、筋力低下を防ぐためにラジオ体操を勧めるなど、患者の症状に合わせて対応しています。

西尾も例外ではない

「今、世界中、日本中で起きている危機的な状況は、西尾も例外ではない。『自分は大丈夫』と思わず、いつ、どこで感染してもおかしくないと強く認識してほしい」と、真剣な表情で訴える高田看護師。一日も早い新型コロナウイルス感染症の収束を信じて、今日も患者と共にコロナと闘っています。



6階東病棟に入る看護師。感染予防が徹底され、他の病棟とは「別世界」

i 新型コロナウイルス感染症に関する最新情報

今回の特集記事は、6月1日現在の情報を基に作成しています。新型コロナウイルス感染症に関する最新情報は、市ホームページや各公式SNSなどでご確認ください。



市ホームページ



西尾市LINE
公式アカウント



市公式Facebookページ
「広報にしお」



市公式Twitter

感染症収束の鍵 ワクチン接種

西尾市では4月に高齢者の新型コロナウイルスワクチン接種が始まり、7月中旬以降は64歳以下の方の接種も順次始まります。接種が進んだ一部の国では、マスクを着用せずに外出できるようになるなど、感染症収束の「鍵」となるワクチン。医療従事者として実際に接種した医師に、副反応などの状況を聞きました。

ワ

クチン接種後に現れる副反応は人それぞれ」と語るのは、

市民病院の内分泌内科医長である川久保充裕医師です。医療従事者である川久保医師は、すでにワクチンを2回接種しています。

焦らずに順番が来たら接種を

川久保医師によると、ワクチン接種後は筋肉痛や倦怠感を感じたり、2回目の接種後に免疫反応によって発熱したりすることがあるそうです。しかし、無症状の場合もあり「過度に心配する必要はない」と語ります。また、ワクチンは西尾市にも十分な量が供給されるため「焦らずに、自分が打てる順番が来たら接種を」と語ります。

接種後も感染予防が必要

「ワクチンは接種すれば感染をしなくなる万能薬ではない。重症化の予防策として自分を守る一つの方法と捉え、気を緩めずに今まで通りの感染予防を続けることが必要」とも語る川久保医師。ワクチンの接種後も「コロナにならない・させない・広げない」ための行動が重要です。「自分だけでなく、大切な人を守るために、3密を回避するなどして感染を予防してほしい。でも、注意していても感染してしまう人はいる。なった人を責めてはいけません。私たちが闘っているのはコロナウイルス。それを忘れてはいけません」と、川久保医師は西尾市民一丸となって危機を乗り越えようと呼び掛けています。



市民病院 内分泌内科 医長
川久保 充裕 医師